

## 国姓爺寓居

〔西六条本願寺御堂前興隆寺の地なり。或人曰、初此所は本願寺の侯人七里氏の宅地なり。国姓爺は

寛永元年日本に生れ、若年より七里氏の家に勤仕し、武術を諸方の名士に修練し、壮年に至つて中華に渡り、大明九世の孫唐王を取立て、功名の後かの王の錦の旗に自筆の書翰を添て酬恩の為に七里家に贈る。此奇品西本願寺の宝庫に収めありしとぞ。一説に後世此錦の旗を切裂てかの寺の家中に賜る、今一二ヶ所伝来しけるとなり〕

清■海鄭居仲著国姓爺鄭成功伝、其大意に曰、

夫国姓爺は忠精義胆の人也。姓は鄭氏、初の名は森、字は大木といふ。父は大明泉州の大守に仕て、名を芝龍、字を飛

黄と号す。一年落魄して漂泊の身と成、日本へ渡り、倭婦を娶り、国姓爺を産。父芝龍は程なく大明へ帰国し、厥后日

本へ金幣を貽り、壮年の時国姓爺を迎ふ。風儀整秀倣儻にして大志あり、常に東に向ふて其母を望む。金陵の術士国姓

爺が相を見て、是奇男にして骨相凡に非ず、命世の雄才也。其頃福王は江左に立て、元を弘光と改め、芝龍を南安伯に

封ず。明の大祖九代の孫唐王を迎て福州に即位し、元を隆武と改む。国姓爺唐王に謁し、天子の姓朱の字を賜り、鄭成

功と号し、御營中軍都督に封じ、尚方の劍を賜ふ。是より海外国姓と称す。是年日本より母を迎ふ。大明永曆二年漳州

府城を陥し、同二年鞞鞞と合戦し、同五年数奇策を用て■澳に二十余万の兵を率て鞞鞞を攻る事数度也。同十年に泉州

に於て大に合戦す。遂に延平王招討大將軍国姓爺鄭成功と号す。大明永曆十六年〔日本寛文二年に当る〕台湾に於て軍

務の勞に歿す。〔年三十九歳、隆武元年より起つて永曆十六年に至る、凡て十七年なり。成功が子鄭經よく父の志を継

て、父子三世三十九年の間明王を補佐す」其後大清二代康熙皇帝詔して曰、成功は明室の遺臣にして吾乱臣賊子に非ず、故に国姓爺及び長子鄭經と共に、南安県に於て礼を以て帰葬し給ふ事田横が故事の如しと云云。「田横は漢の高祖の時戦ふて討負海島に逃て自殺す。高祖これを葬るに王者の礼を以てす、上件の鄭居仲が著す国姓爺伝には、七歳の時鄭成功を呼迎しと書しは誤ならんか。近年浪花の兼葭堂合して和刻し、金龍道人の叙あり、又芥煥が跋あり。其言に曰、吾日本より名を顕すもの、古昔、晁衡、黄備。近古、豊臣太閤、鄭成功の四人のみなり。晁衡黄備は文学の名士なり、秀吉公は撥乱の人傑なり、鄭成功は此伝のみにして明史に載ざるは清朝の忌言あれば立伝なしとぞ。忠精は本朝の楠公父子に比せしならん」

源頼光館

〔西六条七条の北、興正寺の侯人下間氏の地なり。相伝ふ、大江山に酒吞童子ありて、これを退治と

して頼光の家臣四天王と共に山臥の容にかへ、かの鉄城へ入毒酒を勧め、不意に剣を抜欺し討にせしとなり。鬼神神通を得て、此計策を知りなば大ひなる災ならん。抑頼光公は六孫王の嫡孫にして、多田満仲公の長男なり、代々天下守護職の家なれば、命を下して軍勢を以て滅さんや、当家の末孫頼朝公の富士の牧狩は武將の操ならん。按ずるに、大江山は画図の一興に書しと見へたり、今かの地に古跡あるは後世準へ作るものなり〕

猪隅社いのくまのやしろ

〔初は西本願寺玄関門の前西側、

下間刑部卿第ありしが、近年稲荷御旅所の社人田中たなか氏の社地にうつす。旧

地に神木今にあり〕